

水族館からスタートした 水産実験所



新舞子水産実験所(当時の絵はがきから)と
新舞子水族館広告(広報誌「名鐵電車」昭和11年7月号裏表紙)

水

産実験所が愛知県知多半島の新舞子、今の中部国際空港近くの伊勢湾岸に誕生したのは昭和11(1936)年7月のことだった。水族館付設を条件に、名古屋鉄道株式会社からの寄付を受けて設置されたもので、その時の広報誌「名鐵電車」の裏表紙(写真)には、東京帝国大学直営、東洋一の新舞子水族館開館の予告が大きく掲載された。本文中には海水浴でにぎわう新舞子の記事もあり、新たな観光施設として水族館誕生への大きな期待がうかがえる。大学としてはあくまで実験所であつたが、毎年10万人ほどの来場者があつて、社会教育施設としての側面が大きかつた。翌昭和12年12月、愛知県泉村、渥美養魚、名鉄の寄付により渥美半島三河湾岸の伊川津にも水産実験所が開設された。こちらは木造平屋の小さな研究室の他に大きな養魚池も整備され、もっぱら教育研究に利用されていた。交通事情も良くない当時、相互に訪問するだけで1日がかつたという2か所での運営には苦勞も多かつたものと想像される。

浅海域の生態研究、ノリの生活史に関する研究、ウナギやクロダイに卵を産ませて育てる種苗生産研究など、時代の先端を切り開いてきた旧水産実験所も、昭和40年代に入ると水質悪化が深刻となり、水族館も時代のニーズに合わなくなった。昭和45年にはこれらを統合し、浜名湖弁天島に移転することとなった。私と実験所との関わりは、真新しい浜名湖の実験所で研究を行なつた大学院時代と、30年後の平成12(2000)年から教授としてこの地に赴任してからがほとんどで、旧伊川津実験所での最後の学生実習は経験したもの、その記憶は霞んでしまった。この原稿の執筆を機に旧実験所の歴史を紐解くと、日本の水産学の基礎を形作った多くの先人たちの名前に圧倒される。施設設備も充実し、教育研究環境が飛躍的に向上した今の水産実験所だが、その輝かしい歴史に恥じないと胸を張れるだろうか。汗顔の至りである。

水産実験所

鈴木 讓 教授